

魔法少女リリカルなのは～笑顔のために～

sinku0004

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公の鷹城春夜は交通事故にあいそうだった少女を助け、代わりに自分が事故にあい死んだ。しかし、助けた少女は神様で助けたお礼に転生することに。

原作知識皆無の主人公。アルトセイムの山中で、穏やかに日々を過ごす。ある日、川で溺れている少女を助ける。そしてそれが後に彼が関わることになるある『事件』の第一歩となる。

29／8／8 サブタイトルを削除しました。

目次

設定	
登場人物紹介。	1
原作前	
プロローグ	4
プロローグ2	11
第一話	16
第二話	20
第三話	25
第四話	31
第五話	35
第六話	39
第七話	43
第八話	48
第九話	53
第十話	58
第十一話	62

設定

登場人物紹介。

鷹城 春夜（たかしろ しゅんや） イメージC・V 間島淳司

身長135cm 体重38kg

ステータス（原作開始前。フェイトと邂逅時）

魔力値 A

空戦 B

陸戦 A

射撃 S

総合 A A

レアスキル

凍結変換素質

戦闘に関して

空戦では魔法陣を足場として利用。飛行魔法も習得しているが、常時飛行魔法を使用した戦闘は苦手。

中々遠距離での戦闘を得意とするが陸戦においてはこの限りではない。戦闘方は戦術や戦略を用いての奇襲。戦闘において正々堂々という様な精神は持ち合わせていない。素手にはナイフや銃を、銃には爆弾やミサイルを。といった感じである。

性格

ミリオタ。銃器や兵器が大好き。

お人好し。困っている人を見ると無視できずなんとか力になろうとする。

子供好き。決してロリコンとかではない……はず。

基本的にどんな相手でも悪いところよりいいところを探そうとするので、あまり敵味方区別はないが一度敵と認めると容赦なく、敵の命を取ることに一切のためらいがない。

アマテラス（天野 美希） イメージC・V 遠野そよぎ

???歳（神であるため実年齢は不明。身体年齢は18〜20） 身長

152cm 体重——kg（本人によって消されました） B81／

W57／H83

茶髪。普段はツインテールだが偶に、ポニーテールなど他の髪型にしている時もある。

性格

明るい性格で元気者。自分を助けてくれた主人公に感謝していると同時に現在は観察対象と見ているが、一緒にいるうちに段々と主人公のことを好意を抱く。

気に入った者は大切する。主人公と共に転生後は主人公のユニゾンデバイスとして奮闘中。

様々な魔法も使いこなすことができるが、本人の魔力を越える場合は魔力はマスターのものを使用する。本人の魔力値はAランク。近接戦闘も並以上だがそれ以外に特殊能力などはない。

クライシス

クリスタルの色は蒼。指輪型のインテリジェントデバイス。魔力カートリッジシステムを搭載。

機能

状況に合わせたバリアジャケットの自動展開。強襲（アサルト）モード、狙撃（スナイパー）モード、魔法戦闘全力補助（マジックバトル・フルサポート）モードの3つのモードがある。

・強襲（アサルト）モード・・・M4の形状で銃剣が着剣されている。固定銃床で銃床の真ん中にクリスタルがある。

・狙撃（スナイパー）モード・・・L96の形状で同じく銃床にクリスタルがはめられている。

・魔法戦闘全力補助（マジックバトル・フルサポート）モード・・・ジャケットの展開が不可。形状は待機状態と同じ指輪型。自動障壁

展開、常時障壁展開、自動回復が可能となり、様々な魔法が無詠唱で使用可能。ただし、魔力消費が激しいうえ長時間使用するとデバイスが破損する。

性格

あまり喋らないが面白いことは見逃さない。主のことを第一に考えているため、偶に無理をして破損することも少々。しかし、魔法戦闘におけるデバイスの重要性はわかっているので、大破するようなミスはしない。

主が戦闘によって意識を失うと自動的に付近の安全な場所へと転移する。

原作前

プロローグ

「まったく・・・ついてねえ・・・」

俺こと鷹城 春夜（たかしろ しゅんや）は薄れゆく意識の中、誰にも聞こえないような小さな声でそう呟く。

「ケガ、ないか？」

俺は目の前で心配そうに顔を覗き込んでいる見た目、12と14歳程度の茶髪ツインテールの少女に問いかける。

「うん・・・お兄さんは大丈夫？」

「はは・・・これが大丈夫に見えるなら眼科に行くことをオススメするぞ？」

俺の状態は最悪だった。既に両足の感覚はなく、腕も右腕しか動かない。さらに横腹を切ったらしく出血が止まらない。頭からも少量の血が流れている。

原因は交通事故だ。トラックに轢かれそうだった少女を突き飛ばして助けた。代償に俺がトラックに轢かれフロントガラスにあたり、その後はトラックの屋根を転がり道路に転落。さらに後方からきた車に両足を踏まれた。結果はご覧の有様だ。

だんだんと視界が黒く染まっていく。目を開けているのが辛い。俺は自分の死が近いことを悟った。

「本当についていけないな。畜生、耳も聞こえなくなってきた。俺は先に逝くけどもう事故なんかにあうじゃないぞ？」

「はい。でも大丈夫です。貴方の人生はここでは終わりません。」

そんな彼女の言葉を最後に、俺は目を閉じる。

どういうことだ？と聞きたかったがもう口を動かすこともできずにそのまま意識を手放した。

「知らない天井だ」

気がつくと俺はまったく見知らぬ場所に居た。周りを見渡して見るとピンクのカーテンやぬいぐるみなどのかわいい系の物が目に入ってきた。

そして隣りを見ると美少女が俺の隣で寝ていた。

「すう〜すう〜」

「……」

な・ん・だ・こ・の・状・況

落ち着け。落ち着くんだ。c o o r になれ。

一度状況を整理しよう。

少女を助ける↓瀕死↓気絶（恐らく死んだ）↓気づけば部屋の中。

……訳分からねえ！

何で死んだと思ったら女の子の部屋で寝てるんだよ！

ん？ この娘どこかで見たような……そうだあの時助けた女の子。

「うん……」

とその時、少女が目を擦りながら起きてきた。はっきり言ってす

ごく可愛い。お持ち帰りしたいくらいだ。

「……」

「……」

「……おようございます」

「あ、ああ。おはよう」

「……」

気まづい。非常に気まづい。

何か話さなければとその時、少女が突然話しだした。

「あの……ごめんなさい！」

「え？ あ、もしかして事故のこと？」

「はい……」

「それは君が謝ることじゃない。あれは事故で俺が助けたくて助けた

だけだ。君に非はない」

「ですが・・・」

「それよりもこの状況どうなってるの？俺、死んだはずだよね？」

「それは今から説明します」

.....

.....

.....

.....

.....

「まとめると、君は神で俺が死んだあと俺の魂はここに転送され、俺が起きるまで待っていた君は眠くなって一緒に寝た。で俺はこれから君を助けたお礼に転生する。あつてるか？」

「はい。大体は」

信じられない。だが嘘を言っているようにも見えない。彼女が言っていることが本当なら俺が死ぬ前のあの一言も納得出来る。

それにもしこの少女が神でもなんでもなく普通の人ならば俺が生きている（厳密には死んでいるが）の説明がつかない。あの時助かって、この子が俺を騙そうとしているという可能性も否定できないが可能性は低い。そもそもそんなことをする理由がない。

以上の理由から俺は彼女の神であるということ信じることにした。

「信じられない。だけど恐らく嘘ではないのだろう」

「え？ 信じてくれるんですか!？」

「だからそう言っているじゃないか」

彼女はとても驚いたのか語尾が強くなる。まあ普通なら信じないだろう。でも俺にはどうしても彼女が嘘を言っているようには見えない。それにあの状況で俺が生き延びたとは考えにくい。まだ救急車の音すら聞こえなかったんだからな。

「ところで神の君が何であんなところにいたの？まさか人間と同じ世界に住んでいる訳ではないだろ？」

「・・・それ私以外の神に言っちゃダメですよ。私があそこにいたのは映画を見た帰りだったからです。神にだって娯楽は必要です」

と神だと名乗る少女は無い胸を張りながら言う。

「・・・今、失礼なこと考えませんでしたか？」

・・・どうやら神というものは人の思考まで読めるようだ

「気のせいだ」

というかやつぱり神って他にもいるんだ。

「本題に戻ろう。転生って元いた世界にはできないのか？」

「できますよ。ですがその場合は記憶はリセットされます。他の世界の場合は記憶の引き継ぎが可能です」

「了解。他の世界ってどんな世界だ？」

「えくと、貴方の世界でいうリリカルなのは世界になります」

リリカルなのはか。残念ながらあまり知らないな。友人が語っていたのを覚えているが、俺自身は原作も見なかったことない。その友人からゲームを少々やらせてもらったくらいだ。

知っていることといえば、

・映画化するほど人気がある

・魔法がある

・デバイスという補助器がある

・皆さん美少女

ということしか知らない。

「他の世界は無理なのか？」

「無理ではないですが、私の管理している世界は限られていますから。他の世界だと

- ・アンパンマン
- ・ドラえもん

になりますね」

アンパンマンとか人外ばかりだし、一見ドラえもんは平和そうに見えるけど地味に死亡フラグあるし。

「まあ魔法とか興味あるしなのはの世界でいいよ。転生特典みたいのはあるのか？」

「もちろんありますよ。じゃないと死亡フラグがやばいですからね。まあ原作と関わらなければそうでもないかもしれないかもしれませんが、そんなの面白く・・・無理だと思いますし。希望があれば可能な限り聞きますよ」

・・・面白くってなんだ。面白くって。しかも無理とか。

「・・・わかった。では次のものを頼む。

・魔法に関する様々な知識

・様々な才能を持つ体

・現在、実用化されている銃や手榴弾、ロケットランチャーなどの個人で使用できる兵器全て（弾薬含め）

・機動戦闘車1台、装輪装甲車2台、高機動車2台、10式戦車1台

・上記を保管できる倉庫

・各武器の扱い方や各車両の操縦方法などの基礎的な知識

以上。大丈夫そうか？」

「はい。それくらいなら」

「よかった。それとデバイスとかはどうなるだ？」

「こちらで適正なデバイスを用意しますよ」

「わかった。できればユニゾンデバイスも欲しいのだが」

「分かりました。なんとかしてみます。では転生について説明しま

す」

内容は簡単なものだった。俺は転生後5年間、こちらの記憶がない上能力も使えないようだ。

つまり、普通に赤ん坊やってろということだ。これについてはありがた。この歳になって母親の母乳を飲むのはかなり抵抗がある。さらにいうと排泄物の処理なども任せなければいけないわけだからかなり恥ずかしい。

後は地球に生まれるか、それとも魔法世界で生まれるかは運次第だとも言われた。

「了解した。ああ、そうだ」

「他になにか？」

「君の名前聞いていなかったな。俺は鷹城春夜。君は？」

「アマテラスです」 ニコッ

「……」

か、カワエエ。

「あの、私の顔に何かついてます？」

「いや、なんでもない。ちよつと見惚れてた」

「？よく分かりませんが質問は以上ですか？ 問題なければ後ろの扉から出発してください」

彼女、アマテラスにそう言われ後ろを見るといつの間にか白い扉があった。

「ああ。色々ありがとう」

「いえ。では良い人生を」

彼女の言葉を聞きながらベットから降りる。というかあまり気にしなかったが今までベットの上で話してたんだ。しかもあんな近くで。

そう思うと少し頬のあたりが熱くなる。それを隠すように扉を開ける。そのまま進もうとしたところで、ふとあることを思いつき振り返る。

「なあ。アマテラス。君も一緒に行かないか？」

「え？」

アマテラスは、まるで豆鉄砲を食らったような顔になる。余程驚いたのだろうか。

「なんていうか・・・理由はないよ。ただなんとなく」

「・・・もしかしてナンパですか？」

「なっ!?! そんなつもりは・・・」

「クスッ」

「笑うことないだろ・・・」

「ふふ。すみません。可笑しかったもので」

「でもまあ無理「いいですよ」え？」

「もともと貴方が死んだのは私のせいですし、貴方がそう望むなら私は構いません」

「本当にいいのか？」

「はい。ですが今一緒に行くわけにはいきません。記憶がないのでは意味ないでしょう?」

「なるほど。じゃあ5年後か？」

「はい。5年後です」

「わかった。じゃ先に逝っている」

そう言って今度は振り返らずに扉を潜る。途中「いくとういう字が違うですよ」という可愛らしい声が聞こえたが、それを無視して扉を潜り抜けた。

プロローグ2

side アマテラス

「よく寝てるな〜」

ベットで寝ている彼の顔を覗き込む。先ほど助けてくれた彼だ。髪の色は日本人特有の黒色。顔も整っている。中の上つてところかな。

私はあの程度のことです死ぬことはないが痛覚がないわけではない。あんなトラックに跳ねられたらかなり痛い。だから助けてくれた彼にはとても感謝している。まあ死ぬとは思ってなかったけど。

現在ここに居る彼は普通なら魂のみで肉体はないのだけど、特別に用意した。話すのに肉体がなかったら不便だよね。

「それにしても男のくせに可愛い寝顔」

ツンツン

と私は彼の頬を突く

「ふわあ。なんだか私も眠くなってきちゃった」

彼が目覚めるにはまだかかりそうだし私も少しくらい寝てもいいよね。私は彼の隣に横になる。

「お休み〜」

そうして私の意識は暗闇に溶けていった。

なんでだか隣が騒がしい。布の擦れる音や一人言なのかなにかブツブツと言っているのが聞こえる。

「うん……」

私は重たい目蓋を持ち上げ、身体を起こす。そして隣を見ると見知らぬ男がいた。

「……」

「……」

誰だっけ、この男。私は寝起きの頭を回転させる。ああ、思い出した。私を助けてくれた男だ。

「……おはようございます」

「あ、ああ。おはよう」

「……」

そしてまた沈黙。なんだか気まずい。何か話題はないのかと思ひ私はとりあえず謝ることにした。

「あの……ごめんなさい！」

「え？ あ、もしかして事故のこと？」

「はい……」

「それは君が謝ることじゃない。あれは事故で俺が助けたくて助けただけだ。君に非はない」

優しいな、彼は。私はそう思った。いくら自分から助けたと言っても彼が死ぬ原因を作ったのは私だ。少しくらい怒ってもいいはずだ

「ですが……」

「それよりもこの状況どうなってるの？俺、死んだはずだよね？」

「それは今から説明します」

そうして私は説明を始めた。彼が何故ここにいるのか、私自身について、これからどうなるのかetc。

「まとめると、君は神で俺が死んだあと俺の魂はここに転送され、俺が起きるまで待っていた君は眠くなって一緒に寝た。で俺はこれから君を助けたお礼に転生する。あってるか？」

「はい。大体は」

それから彼は、顎に手を当て考えるような仕草を見せる。どうやら今私が言ったことの真偽を考えているようだ。きっと信じられないだろう。あたりまえだ。普通ならすぐに嘘だと思はず。少なくとも私が逆の立場ならば信じないし、逆に自分を騙そうしていると警戒する。まあ本当に騙そうとしているならばこんな馬鹿げた手口はないんだけど。もし信じてくれなかったどうしようという不安に駆

られたが、その時はどうにかして信じさせよう。

「信じられないが、恐らく嘘ではないのだろう」

「え？ 信じてくれるんですか!？」

「だからそう言っているじゃないか」

予想外にも彼はあさつりと信じてくれた。まだ半信半疑ではあるようだが、信じてくれたのはありがたい。

「ところで神の君が何であんなところにいたの？まさか人間と同じ世界に住んでいる訳ではないだろう？」

「・・・それ私以外の神に言っちゃダメですよ。私があそこにいたのは映画を見た帰りだったからです。神にだって娯楽は必要です」

もし彼が他の神に「人間と同じ世界に住んでいるのか？」なんて聞こうものならその場で蒸発させられてもおかしくはない。それくらい失礼なことなのだ

「本題に戻ろう。転生って元いた世界にはできないのか？」

それから私は記憶の引き継ぎに関してや、転生についてなどの説明を始めた。

彼が転生する世界は恐らくリリカルなのは世界だろう。その他で私の管理している世界は自分でいうのもなんだがろくなのがない。まあ管理といっても基本見ているだけなんだけどね。たまに異分子子的なのがあるけど大体は世界補正でなんとかなるし、私が介入するのは極希だ。

「他の世界は無理なのか？」

「無理ではないですが、私の管理している世界は限られていますから。他の世界だと

・アンパンマン

・ドラえもん

になりますね」

私が、そう言うと彼は少し苦い顔をした。まあ・・・なんとなくわかるかな。アンパンマンの世界はほとんど人じゃないし。今まで通りの平穏な日常を求めるのならばドラえもんの世界だけど、あそこ地味にフラグあるのよね・・・ まあフラグがある点はなのはの世界

も同じだけど。

結局彼は、なのはの世界を選択した。そして話は転生特典の話になった。

特典として彼が希望したのは以下の四つだった。

- ・魔法に関する様々な知識
- ・様々な才能を持つ体
- ・現在、実用化されている銃や手榴弾、ロケットランチャーなどの個人で使用できる兵器全て（弾薬含め）

・機動戦闘車1台、装輪装甲車2台、高機動車2台、10式戦車2台

- ・上記を保管できる倉庫

- ・各武器の扱い方や各車両の操縦方法などの基礎的な知識

兵器系のものは珍しいような気もするけど一般的にチートと言われるものだろう。だが彼の場合はまだいい。他の神から聞いた話だが転生する際ほとんどの男はハーレムを望み、容姿の設定やニコポ、ナデポなどをつけたがるらしい。まあ彼ももしかしたらこれから言うのかもしれないけど。とりあえず私は彼に大丈夫だということ伝えた。もし彼が後から容姿設定やニコポ、ナデポを望むなら叶えてあげるつもりだけど。

結果的に彼は追加での特典希望はしなかった。

そして最後に、デバイスと転生後の説明をしいよいよ送り出すという時になって彼はこんな事を言い出した。

「なあ。アマテラス。君も一緒に行かないか？」

「え？」

私は自分でも情けないと思うような声を上げてしまった。それほどまでに彼、鷹城春夜の発言は私を驚かせた。面白いというか怖い者知らずな人だ。仮にも神である私に。しかも、神であると知った上であの様なことを言うなど。もしあのようなことを私以外の神に言えば、それこそ本当にその場で蒸発もしくは灰塵にされても不思議はない。それほどまでに今、彼は神である私を侮辱している。しかも本人は自覚がない。本当に面白い。私はそんな彼を少し苛めてみた

なった。

「……もしかしてナンパですか？」

「なっ!? そんなつもりは……」

「クスッ」

「笑うことないだろ……」

「ふふ。すみません。可笑しかったもので」

「でもまあ無理「いいですよ」え？」

「もともと貴方が死んだのは私のせいですし、貴方がそう望むなら私は構いません」

「本当にいいのか？」

「はい。ですが今一緒に行くわけにはいきません。記憶がないのでは意味ないでしょう?」

「なるほど。じゃあ5年後か?」

「はい。5年後です」

「わかった。じゃ先に逝っている」

明らかに「いく」という字が違うのだが、そこを指摘する頃には彼は既に扉の奥へと歩を進めていた。

まったく、本当に面白い人。さて、私も色々と準備しなきゃね。

side
了

第一話

俺がこの、リリカルなのは世界に転生してから5年の時が過ぎた。アマテラスの言うとおり、俺の記憶は5歳になった瞬間、つまり俺の誕生日である12月25日午前0時に全て戻った。

そして前日にはこの世界での父が帰ってくる日だった。俺のこの世界での父親、鷹城 春介（たかしろ しゅんすけ）は管理局本局所属の空戦魔導師。階級は二等空佐。一ヶ月程、長期任務で家を留守にしていた。ちなみに母親である、鷹城 真夜（たかしろ まや）も管理局本局所属の空戦魔導師だ。階級は父親より一つ下の三等空佐。現在は育児休暇中だ。

両親は二人共日本人。現在、俺たちが住んでいる場所はミッドチルダ アルトセイム地方のとある山中。ここ、アルトセイムは山と森、湖に囲まれた自然豊かなところだ。

誕生日の前日12月24日、父が帰ってきたのは夜の11時。予定では昼には帰って来れるという事だったが、トラブルか何かで大幅に遅れてしまったようだ。帰ってきたとき父は一人ではなかった。一人の女性と一緒にだった。その女性とは身長150cm程度、黒髪ツインテール。そう、アマテラス本人であった。

そのことについて、母と一悶着あったようだが、父がなんとか事情を説明し、理解してもらえたようだ。

現在時刻は午前6時。母は毎朝5時には起きて、朝食の準備やその他の家事をやっている。なので俺はこの時間に毎朝一人で起きるのだが、この日は違った。

目覚めるとまず最初に、軽い吐き気と酷い頭痛に襲われた。恐らく記憶が戻った副作用かなにかだろう。それが収まり隣を見ると、

「おはようございます♪ マスター♪」

桃色髪の美少女、アマテラスがいた。

それ自体にはなんの問題もない。問題なのは彼女の格好だ。彼女は下着姿でそこにいたのだ。

「なんで、下着姿なんだよ・・・」

俺は、アマテラスから視線を外しながらそう言った。だが、悲しいかな、どうしてもチラチラと覗いてしまう。

「私、寝るときはいつも下着なのです。あ、マスター照れてます？ 可愛いですね〜♪ でも、まだ5歳なのに、おませさんですね〜♪」

アマテラスはそう言いながら、さくさくと着替えを始める。正直、こちらとしては勘弁して欲しい。確かに、肉体年齢は今日で5歳だが、精神はもう22だ。

「何が3歳だ。精神は22だ。もう成人だぞコラ」

「ふふ、そうでしたね♪ でも、ということは記憶はちゃんと戻ったみたいですね。あ、終わりましたよ」

「ああ。お陰様でな」

着替えが終わったアマテラスへと視線を移す。アマテラスはジーンズに半袖tシャツというラフな格好だ。

ちなみに今までの俺、0〜5歳になるまでの記憶はちゃんとある。まあ、大した記憶ではないがな。でも、さすがに母親の母乳の飲んでいたという記憶はちよつと、いや、かなり恥ずかしい。

「あら、起きていたのね。ご飯できたわよ」

「うん。わかったよ。すぐに行く」

アマテラスと話しているうちに朝食を作り終えた母に呼ばれ、二人で食卓へと向かう。

食卓に着くとそこには父が座っていた。

「おはよう。二人とも」

「おはよう。お父さん」「おはようございます」

間もなくして母も席に着き、朝食が始まった。アマテラスはなんだか慣れないようだ。まあ、昨日来たばかりだし、それに今まで立場上こういう機会はなかったのかもしれないので理解できる。

俺は俺で少し考え事をしていた。それは俺自身のことを両親に話すべきかどうか。だが話したところで理解、いや、受け入れてもらえるかどうか……

この前まで字も読み書きできなかつた息子が、いきなり16歳になったようなものだ。事情を説明されても簡単に受け入れてもらえ

るとは思えない。

「春夜は何がいい?」

「え?何が?」

どうやら思考に没頭しすぎたようだ。まったく話を聞いていなかった。

「何って、誕生日のことよ。今日、春夜、誕生日でしょ? だから、何か欲しいものとか食べたい物がなくなっているのかなって」

「ああ。ごめん。ちよつとボーっとしちやって」

「大丈夫?どこか具合でも悪いの? さつきからあまり食べていない様だし……」

ふと、皆の顔を見してみる。両親は二人とも心配そうな表情でこちらを見ていた。アマテラスは少しニヤついていた。恐らく俺がなんで悩んでいるのかわかっているのだろう。

はあく なんだか悩むのが馬鹿らしいようになってきた。もうどうとにでもなれ。俺は意を決しすべてを話すことにした

「大丈夫だよ。それよりお父さん、お母さん。ちよつと話があるんだ」
それから俺は全てを話した。さすがにアマテラスのことや能力のことは言えなかった。つまり、俺が転生者であること少し前に記憶が全て戻ったことなどを話した。

正直少し怖かった。事情を知った二人が俺を拒絶するのではないかと。だがそんなのは杞憂に終わった。話を聞いた二人は最初は疑わしそうに見ていたけど、俺が転生者だと証明(文字を書いたり数式を解いたり)すると一応は信じてもらえたらしく、驚いた表情で俺を見つめていた。

「そうだったんだ……信じられたいけど、本当なんだね。でも、なんとなく納得しちやった」

母がそう言った。俺はなんのことか分からずにいた。すると母はこう続けた。

「だって今日、春夜のこと見た時少し違和感あったから。なんというか大人っぽくなったかんじ?」

「……ごめん」

俺はなんだか申し訳なくなり誤った。俺という存在が二人の子供を奪ってしまったかのように思えたからだ。

「ふふ。なんで春夜が謝るの？春夜は何も悪いことしてないじゃない」

「そうだぞ。たとえ前世の記憶があつたとしても、春夜は俺達の息子だ」

その言葉に俺は救われたような気がした。そのあとは父と母、そしてアマテラスに誕生日を祝ってもらい楽しい一日を過ごした。

第二話

さてあれからさらに5年が経過した。この5年間はひたすら訓練の日々だった。

アマテラスはどうやらメイド兼家庭教師としてこちらに来たらしい。主に特典であった魔法に関する知識や武器・車両に関する知識教えるということだ。その他、戦闘訓練も行うとか。そのほかには、母も育児休暇が終わり、両親は仕事で殆んど家にいない。それでも夜はなるべく早く帰ってくるし、家族と過ごす時間もすっかりとっている。だが、家事まで手が回らないので家事全般はアマテラスの仕事となっている。ただし、料理だけは俺とアマテラスの2人で行う。アマテラスだけに任せると危ないし、材料が無駄になってしまう。

ちなみにアマテラスだがこちらでは天野美希と名乗っている。どうやって父と知り合ったのかは不明だ。

訓練だが、まずは魔法中心に行われた。1年目は基礎知識とその実践。そして2年目は銃や車両に関する基礎知識と実践。3年目は今までの応用を徹底的に。4年目以降はより実践的な訓練を。

デバイスは4年目でやっと渡された。クリスタルの色は蒼。指輪型のインテリジェントデバイス。俺はクライシスと名づけた。ちなみにこの時、3本の腕輪を渡された。アマテラス曰く、「この腕輪は1本につき1回、どんなことでも叶えてくれる。本当に困った時に使つてね」だそう。なんでこんなものをくれるのかと聞いたところ、「今まで楽しませくれたお礼。もちろんこれからも楽しませて貰うけどね♪あ、何でもって言ったけど、死人を生き返らせるとか世界を破壊するとか、この世界のバランスを崩す様なことは無理だから」との回答を頂いた。

クライシスの特徴はバリアジャケットの自動展開。これはクライシスがジャケット展開が必要と判断した場合、もしくは俺が展開を命じた時、状況に応じたバリアジャケットを展開する。なお、形状は俺の記憶からクライシスが自動的に選択する。

一度外で展開してみたら陸自の戦闘服だった。次に室内で展開を

行ったところ黒色の戦闘服を着ていた。訓練中に展開を行ったところプロテクターやボディーアーマー等が追加される場合があった。中々便利な機能だ。

クライシスのモードは3つ。一つは強襲（アサルト）モード。M4の形状で銃剣が着剣されている。固定銃床で銃床の真ん中にクリスタルがある。次に狙撃（スナイパー）モード。L96の形状で同じく銃床にクリスタルがはめられている。この2つのモードでは共に魔力カートリッジが使用できる。通常魔力弾の発射のための魔力供給は使用者から直接供給されるため、度々リロードをする必要がないがより強力な弾丸や特殊な弾丸を発射する場合にはカートリッジを消費する必要がある。

そして最後に、魔法戦闘全力補助（マジックバトル・フルサポート）モード。文字通り魔法戦闘を全力で補助する。処理情報が多いためジャケットの展開が不可。さらに形状も待機状態と同じ指輪型。自動障壁展開、常時障壁展開、自動回復が可能となり、様々な魔法が無詠唱で使用可能。ただし、魔力消費が激しいうえ長時間使用するとデバイスが破損する。

そして俺には、古代魔法が使える。というか習得した。古代魔法とは空気中にある魔力を糧に魔法を発動させる。だけど、これは非殺傷設定ができないうえにある程度の知識、呪文の意味を理解し、構成しないと使えないことから今では使えるものはいない。ゆえに古代魔法とまで呼ばれている。らしい、あくまで知識としてアマテラス：美希に教えてもらったことなのであつてそれが今はどういう扱いかわかはしない。

これで俺が願った特典は殆んど達成されている。しかし、銃器や他の武器、車両をどこにあるのだろう。美希に尋ねて見たところ、別次元にあるということがわかった。行き方は簡単だった。クライシスにメモリーされている座標に転移すればいいだけだ。

さっそく行ってみたのだが、俺が望んだとおり銃器や車両がずらりと並んでいた。あれは興奮したね。「新しい玩具を与えられた子供のよう。というか子どもか♪」と後ほど美希が言っていた。ちよつと恥

ずかしかったが、確かに子どもなので気にしないことにした。

ちなみにそのあと美希からタブレット端末をもらった。そこには倉庫内の武器や車両等のリストがあった。ここから選択をすれば自由に出し入れでき、さらに追加で物収納可能だという。倉庫内は時間が停止しているので燃料の劣化とかもないとか。

なんか核とか原子力潜水艦とかあるんだが……大丈夫だよな？

閑話休題。

現在俺は総合戦闘訓練を行っている。現在時刻は午後2時。朝、朝食を食べたあとすぐにデバイスだけを持たされて、目隠しをされて知らない森の中に連れてこられた。美希は、「今回は魔法無効化エリア内という想定で行います夜7時までに家に帰ってきてね。デバイスは戦闘以外には使っちゃダメ。本当は武装も質量兵器だけにしたかったんだけど、それはちよつと危ないから。飛行魔法はもちろん禁止。所々トラップや妨害が入るけど、頑張ってね♪」と言って放り出された。ちなみに父と母は仕事で今日も帰りが遅い。

理不尽だ。無茶だ。とは思ったが、この訓練の有用性はわかるので、文句言わずに了承の意を伝えた。美希が去った、というか転移したのを見届けて俺は行動に移った。ちなみに今の俺の装備だが、ブーツに65式作業服（下のみ）にODのtシャツだ。

最初に俺は川を探した。それにそって移動すればどこかにでるだろうと思ったからだ。水が流れる音は聞こえていたので、川は簡単に見つかった。流れが急なうえ水深も2〜3m程。今の俺くらいなら簡単に流されるな。俺は川にそって下っていった。途中、美希の言うとおりにトラップがあったがどれも簡単なものだった。落とし穴やラープを使った罠、どれも気をつけていけばなんともない。対地雷まであってびつくりしたが、たえ実際に踏んでも爆発しなく代わりに設置型のバインドが発動された。途中、明らかに罠だとわかるようなものも。なんでバナナがこんなところにぶら下がってるんだよ。明らかに罠だろ。と思いつつも引っ張ってみると、上から大量のローションが。

どんな嫌がらせだよ。というか滑ってあぶねえ。危うく川に落ちるところだった。とりあえずローションを川の水で全て落とし、移動を続けた。1時間程度移動したところで俺は、一度休憩をとることにした。

「ふ〜」

川の水をを飲み、途中採取した木の実を食べる。そうして10分程度休憩をとり、そろそろ行こうと思っていいたら

「・・・けて・・・」

「ん？」

どこからか人の声が聞こえた。空耳かと思いい移動を開始しようと思ったが、そこで何やら川が流れる音とは別な音が聞こえた。この音は・・・誰かが溺れている？

とその時俺の前を誰かが通過した。しかも川の中。

「あぶっ・・・だれか・・・けて・・・」

「っ！」

流されていたのは金髪の少女だった。俺はすぐに行動を開始した。まず飛行魔法を使用し、少女へと接近する。

「掴まれっ！」

そこから手を伸ばす。少女も懸命にこちらに手を伸ばす。だがもう少しというところで少女は沈んでしまう。

俺は迷わず川の中に飛び込んだ。そして、少女の腕をなんとか掴み引き上げた。

「けほっけほっ」

「大丈夫か？」

「うん・・・なんとか・・・」

少女は弱々しく返事をする。無理もない。死にかけてんだ。助かったからといってすぐに元気にもなれないだろう。俺は少女を抱いて、陸に降りた。

「俺は鷹城 春夜。君は？」

「フェイト・テストアロツサ・・・です」

「そうか。じゃあフェイト、しばらく休もう。話はそれからだ」

「うん」

これが俺とフェイトの最初の出会いだった。俺はこの時、思ってもいなかった。フェイトと・・・いや、テストタロツサ家と長い付き合いになるとは。

第三話

「落ち着け！ 話せばわかる！」

俺は襲いかかる魔力弾の嵐を避け、時にはで障壁で防御しながら懸命に相手に訴え掛ける。

「ふふ・・・安心してくださいフェイト。今、このロリコンを消し飛ばしますから」

「り、リニス・・・？」

「誤解だ！ そもそも俺は・・・あぶなッ！」

先程の頭があつた位置に黄色い魔力弾が通過する。しかも後ろから。

なぜこんなことになっているのか。時間は数分前に遡る。

「さて、いつまでも濡れた格好していると風邪をひく。クライシス、収納領域からタオルを」

『了解しました』

俺は手早く着替えたあと、クライシスの収納領域からタオルを取り出す。この収納領域というのは便利なものだ。

クライシスの収納領域は車1〜2台分。かなりの物が入る。俺は戦闘用から日用品まで様々な物を入れている。

まあ、あまり大量の物を入れると、処理能力などに影響がでて戦闘に支障をきたすのであまり余計なものはいれられない。現在、収納領域の使用率は1〜2割程。5割を超えると影響が開始める。

魔法戦闘全力補助モード以外はそこまでの能力は必要ないので、6〜7割程度まで、一時的になら使用しても問題ないだろう。

俺は取り出したタオルでフェイトの濡れた髪を拭きながらフェイトに話しかけた。

「フェイトは何歳なんだ？」

「うくと・・・7歳！」

「そうか。ということは3つ下か。一人で遊んでいたのか？」

「ううん。リニスと一緒にだったんだけど途中ではぐれちゃって、リニスを探してたら、川の近くまで来てそれで」

「足を滑らせて川に落ちたよ？」

「うん。本当に死ぬかと思ったよ……」

フェイトは、どおやら少しずつ元気が戻ってきたようだ。リニスとというのが誰だかわからんが、友達もしくは保護者だろう。どちらにせよ、心配しているだろうから早く送り届けてやらんとな。

「ははは。でも、無事でなによりだ。ほれ、いつまでも濡れた服着てないで、早く脱ぎな。俺ので悪いが、着替え貸してやるからから」

髪を拭き終わり、次は体を拭いてもらうためタオルをフェイトに渡した。そこで俺は自分が15〜16歳程度になっているのに気がついた。クライシスに尋ねてみたところ、フェイトを助ける際に9歳児の体よりこちらの方が良いと判断したので変身魔法を使用したとか。どおりで視線がいつもより高いわけだ。今、解除してもフェイトを驚かすだけなのでとりあえずこのまま。着替えが終わって、落ち着いたら解除しよう。

「は〜い、あれ？ 脱げない……」

「大丈夫か？」

「大丈夫……と脱げた。パンツもびしょびしょだ……気持ち悪いから脱いじやお♪」

俺はフェイトに着せるための65式作業服(上)をクライシスの収納領域から取り出す。まったくもう少し恥じらいを持って欲しいものだ。でも、まだ7歳児だし、これぐらい元氣の方がいいのかもな。もちろん俺はロリコンではないので7歳の幼女の裸をみて、欲情するようなことはないので安心して欲しい。

「体吹いたら、とりあえずこれ着て」

そう言つてフェイトにOD色の65式作業服を渡す。その時、フェイトの背後、10m程の距離に誰かが立っているのに気がついた。

「フェイト、あの人が知り合いか？」

俺が指をさしながらフェイトに尋ねる。フェイトは不思議そうな顔をして振り向くと、先程手渡した65式作業服を放り投げ走り出し

た。

「リニス！ リニスだあ！」

白を基調とした服。同色で紺色の線が入ったナース帽のような帽子。どおやらあの人がりニスらしい。フェイトはりニスに会えたことがよほど嬉しかったのだろう。リニスに抱きつき泣いている。それはいい。微笑ましいことだ。だが問題が一つだけある。それはフェイトが裸だということだ。

リニスを見ていると最初はフェイトに会えて安堵の表情を浮かべフェイトに対して、安心させるように微笑み、頭をなでていたが、その表情が段々と氷の様な笑顔に変化し、気のせいか体から黒いオーラが出ているようにみえる。

俺は先程から冷や汗がとまらない。なんで、こんなにタイミングが悪いんだ……

「あ、あの……り、リニスさん？」

「ふふ……貴方はフェイトに何をしたんですか？」

そういうリニスの右手にはいつの間にか先端に黄色のコアが付いている魔法の杖を手にかけていた。

「な、何か誤解されていませんか？ 私はフェイトを……」

「フェイトを……なんですか？」

「フェイトを……ってこのバインド、解いてくれませんか？あと、後ろの大量の魔力弾、どうするつもりですか？」

「ダメですよ♪ この魔力弾は変態ロリコンの貴方にプレゼントします。フェイトがお世話になったお礼です。フェイト、少し離れていてくださいね？」

「あの……落ち着いて話しを……」

「話は後で聞きましょう。とりあえず、いつペン死になさい！」

リニスの背後に展開されていた、20個あまりの魔力弾が一斉に俺に襲いかかる。

俺は力任せにバインドを破壊し、障壁を全力展開。なんとか全ての魔力弾を防ぐことに成功し、安堵した。が、リニスの攻撃は第二波、三波と続いた。

そして、冒頭に至るといわけだ。

「フフフ…」

リニスの目にはもはや色が無い。なにこれ、超コワイ。

それにしてもどうするか。回避行動をとりつつ思案する。このまま相手の魔力切れまで攻撃を躲すことは可能だと思いが、今のまま魔力弾だけの攻撃とは限らないし。砲撃魔法とか他の魔法とか使われ始めたら、面倒なことになる。説得も厳しそうだ。ここは一旦、気絶もしくは戦闘不能にさせてそのあとに話をしよう。つーか、フェイトに早く何か着せなきやマジで風邪ひく。というか、それ以前にいつまでも全裸とか、さすがに可哀想だ。

「仕方ない。クライシス」

『モードはどうしますか?』

「強襲モードだ。カートリッジを使用して、いつきに制圧する」

『了解。号令をどうぞ』

「クライシス、セットアップ!」

『了解。セットアップ』

俺の号令で、バリアジャケットが展開され、クライシスがM4の形態となる。

今回のバリアジャケットは陸自の3型迷彩服。肘と膝にプロテクターも追加された。

俺はフェイトに当たらないように、リニスに牽制射撃を行う。リニスは飛行魔法を使用し、空へと退避する。俺はその隙について近くの茂みへと飛び込み匍匐状態に。魔法で探されればすぐに見つかってしまうが、今は一瞬でも相手がこちらを見失えばいいのだ。俺は、クライシスに銃剣を外させ、代わりにダットサイトを装着する。

「カートリッジロード」

使用されたカートリッジが排莖口から排出される。膝を立て、焦らずサイティング。カートリッジをロードしたことにより、もうこちらの位置はバレているだろうが気にしない。俺がこれから行うのは麻

痺弾の30発射撃。無誘導だがそのぶん速度がでる。相手は回避もしくは防御の準備をしている。チャージはすでに終わっている。俺は引き鉄の遊びを殺す。そして肩の力を抜き引き鉄を・・・引けなかった。なぜならフェイトが大声をあげて射線に飛び込んできたからだ。

「やめて！ 二人とも！」

危なくフェイトを撃つところだった。先程とは違った冷や汗が流れた。俺は射撃を中断すると引き鉄から指を離し、立ち上った。

「フェイト、いきなり射線に入るなんて危ないじゃないか。間違つて撃つところだったぞ」

「そうですよ。フェイト、そこを退いてください。じゃないとその口リコンを殺せないっ！」

「ねえ・・・リニス、なんでそんなこと言うの・・・？」

フェイトは泣きながら話し始めた。

「しゅんやは私を助けてくれたんだよ・・・しゅんやもリニスは悪い人じゃないよ・・・？ 二人とも喧嘩はよくないよお・・・」

「え？この人がフェイトを・・・？」

リニスは驚いている。こうなればもう大丈夫だろう。まったく。今度はこつちがフェイトに助けられたな。俺はバリアジャケットを解除しクライシスを待機状態へと戻す。フェイトにゆっくりと近づき回収しておいた65式作業服をもう一度クライシスの収納領域から取り出してフェイトに着せる。

「ごめんな。でも、もう大丈夫だ。仲直りしたから」

「ほんとう？」

「ああ。もちろんだ。だからもう泣くな」

そう言つて頭を少し乱暴に撫でる。そうするとフェイトは「うん！」と元気に頷いた。俺はそれに安堵し、未だに空に浮かんでいるリニスへと話しかけた。

「ということ、リニスさん。話し、聞いてもらえますね？」

「はあ・・・今回は私が悪かったみたいですね。話し、聞かせてもらいます」

そう言っ
てリニス
はゆっく
りところ
ちらに向
かって降
りてくる
。まあ色
々あつた
けど、と
りあえず
結果オー
ライかな
？

第四話

天野美希ことアマテラスは、春夜と別れた後、上空で訓練の様子をモニタリングしていた。

今までの訓練で、アマテラスは春夜の才能に何度も驚かされた。彼の経歴上、車両や銃器の取り扱い等に関してはすぐ習得するだろうと思っていた。なので最初は魔法から始めた。

最初のうちは優秀な生徒だと思っていた。教えたことを忘れず、指摘したことはすぐ改善する。物覚えがよく、アマテラスは春夜に教えることが楽しくなってきた。そんな時、彼はアマテラスにこんなことを言った。「見て欲しいものがある」と。

不思議に思いながらもアマテラスは彼についていった。到着した場所はいつも魔法の実践を行う野原だった。そこで彼は一つの魔法を使用した。自分の周囲に小さい氷柱を10本程形成し、それを射出するという魔法だ。これだけならば関心はしても、驚きはしなかっただろう。

彼には凍結変換素質があるし、魔力弾形成、射出についてはすでに教えている。それを応用すればこれぐらいは簡単にできる。

「どうだった?」

「ん〜ちよつと微妙ですね。発想自体は良いと思います。威力もこの系統の魔法にしては十分でしょう。しかし、速さがイマイチです。今の状態では実戦で使うには厳しいと思います」

より実戦で使える魔法を。彼はアマテラスが魔法を教え始めた際にそう言った。曰く、「実戦で使えない魔法は、弾がない銃と同じだ」とか。

「手厳しいな。でもまあ速度か・・・」

それつきり彼は考え込んでしまった。

「これなら・・・いや・・・でも・・・」

それにしても、とアマテラスは一つ疑問が浮かんだ。これだけならば態々このように呼び出すだろうか。次の授業の時にでもみせればよいのだ。

「あなたはこれだけのために私を呼び出しのですか？」

「ん？ いや、違うぞ。これだけならば態々呼び出さないさ。俺が今回呼び出したのはこの他にもいくつか見て欲しい魔法があったからさ」

それからは彼は自分独自の魔法をいくつかアマテラスに見せていった。

氷柱を射出し着弾時に爆発させ周囲を凍結させる魔法。五指を伸ばしその延長線上に氷でできた剣や槍を形成する魔法。魔力を限界まで収束、それを爆発させ視界を一時的に奪う魔法など、どの魔法も練度を高めれば実戦で使える魔法だ。だがまだ練度が低く、実際にこのまま戦闘に使うには難しいだろう。

例えば最初の凍結魔法だが、凍結力が弱くすぐに砕けてしまう。これでは相手を一時的に拘束することも難しい。2つ目と3つ目の魔法は形成が遅く耐久度に難あり。しかしこのどちらの魔法も魔導師としての技術が向上すれば問題なく実戦で使えるものとなる。とアマテラスは彼に魔法の感想を聞かれた際にこのように答えた。そして日々の授業や鍛錬で彼の魔導師としてのレベルは着実に上昇していった。

「さすがに、こんな幼稚な罠じゃどうにもならずすよね〜」

魔法で投影されたモニターには現在、春夜が川沿いを歩いている姿が映し出されている。彼は道中の罠（トラップ）をさげ、好奇心からだろうか時にはわざと引っかけかりながら進んでいる。

だが、罠はこれだけではない。本命はこの先にある。発動方法は赤外線やワイヤートラップ、地雷型トラップなど色々があるが問題なのは発動方法ではなくその中身だ。

この先のトラップには、射撃魔法や麻痺系魔法、爆発系魔法などが仕掛けてある。中には引つかかると、どこからか砲撃が飛んでくるようなトラップまである。

少し危険だが、今の彼なら問題なく対処できると判断してのこと

だ。そして映像は春夜が休憩に入ったところが変わった。

「油断大敵。休憩中といえど何が起こるかわからない。ということで何か仕掛けてみましょうかね〜♪」

どうしようかと考えるアマテラス。その時、映し出されている映像に異変があることに気づいた。

その映像は春夜を移しているモニターとは別のモニターに映っていた。

モニターは春夜を移しているもの以外にも複数ある。そのうち川の様子を移しているモニターに異変があった。

「これは・・・人？」

流れる川の映像には金色の小さい物体が映っていた。よく見るとそれは人の頭部であった。何らかの理由で川に落下して、もしくは川に入ったところを足を取られて流されたのだろう。

アマテラスはすぐに春夜に向けて通信(念話)をつなげようとした。が、その必要はすでになく、川に流されていた人物を救出しに向かっていく春夜の様子がモニターに映っていた。

救出は問題なく成功した。問題はそのあとだった。救出した人物の名は、フェイト・テストロッサ。原作の主要人物の一人だ。春夜とフェイトがここで邂逅したのは別段驚くことではない。フェイトはこの時期ならまだアルトセイムに住んでいる。ならばいつか出会うのは必然だろう。なので問題というのはそこではない。

では何が問題か。それはタイミング悪くフェイトの実質的保護者リニスが現れたことだ。全裸状態のフェイトと15〜16歳くらいの姿となった春夜の前に。フェイトが全裸なのは濡れた衣類を乾かすため。春夜はクライシスの判断によって。だがそれは事情を知っているから言えることだ。何も知らない人から見れば春夜がフェイトに変なことをしようとしているようにしか見えない。

しかも、フェイトは再会できたことが嬉しかったのかりニスに抱きついて泣いている。この状況では春夜が悪者に見えても仕方がないだろう。

「このあとどうなるのかは想像できませんし、止める方法もありますけ

ど……まあ面白そうなのでこのままにしておきますか♪」

それからアマテラスはすぐに、残りのトラップの起動装置を切り、トラップ自体にも魔法でロックをかけた。こうなった以上、一度訓練を中断しなければならぬ。恐らくこのまま中止の可能性が高い。もし、その間に誤作動や小動物達に作動させられては堪らない。

一通りの作業が終わったアマテラスは春夜の映るモニターへと視線を向けた。そこではちょうどリニスvs春夜の戦闘が行われようとしていた。

「本当に予想通りになってしまいましたね。では、観戦といきますか」

その後アマテラスは春夜とリニスの戦闘を楽しそうに見ていた。戦闘終了後、春夜より訓練中断の要請があり、アマテラスはこれを受け入れ訓練は一時中断となった。

第五話

「というわけです」

春夜は美希に訓練の中断を申し入れたあとにリニスに対して今までの経緯を全て説明した。春夜が訓練中だということは話していない。話が逸れるだけだからだ。

説明を行う前に変身魔法を解除し、その際に一悶着あったがそれはこの際置いておこう。

「そういうことでしたか。それは失礼しました。フェイトを助けて頂きありがとうございます」

ペコリ、とリニスは春夜に頭を下げた。

「頭をあげてください。俺は礼をいわれるようなようなことはしていませんよ。目の前で助けを求めている人、特にそれが子どもなら誰だって助けようと思います」

「ふふ。おかしなことを言いますね。あなたも子どもではないですか」

「あはは、そうでしたね……」

と苦笑する。某体は子ども頭脳は大人な名探偵の気持ち少しわかるような気がした春夜であった。

「家はこの辺なんですか？」

「まあ……近くではあると思います」

春夜の回答に対してリニスは不思議そうに首を傾げる。これが漫画なら頭に？が浮かでいただろう。

彼女の反応は当然だ。どこに、「自分の家はこのへんだと思います」なんて答える人がいるだろうか。

だが、春夜はこう答えるしかないのだ。なんせ目隠しでここまで連れてこられたのだ。どの方向に自分の家があるのか。そもそもここはどこなのか。春夜自身にはわからない。

彼にわかることは、トラップ等を考慮しても徒歩5時間以内には自宅に到着できるということだけであった。

実際の距離は訓練開始地点から徒歩3時間程度のところに自宅が

あるのだがそれは教官である美希のみが知ることである。

「よくわかりませんが、私達の家はここから20分程歩いたところあるんですけど、もしよければこのあと一緒に食事でもどうでしょうか？ お礼とお詫びを兼ねての。」

「いえ。そこまでしていただかなくても」

春夜は正直早く訓練に戻りたかった。現在時刻は1605(ヒト口クマルゴ)。フェイトの救助、リニスとの戦闘、そして事情説明等を行っているうちにすっかり遅くなってしまったがそれを理由に途中で訓練を中止にはしたくなかった。

「連絡先を教えていただければ、ご両親には私から連絡しますので、遠慮なさらずに。それとも私達と一緒にの食事は嫌ですか？」

「いえ・・・そういうわけではありませんが・・・」

「はあく、ではこれでどうでしょうか。フェイト」

リニスはため息を一度つくつと春夜と話している間、近くで遊んでいたフェイトを呼んだ。

フェイトは「は〜い！」と元気に返事をして、リニスのそばへと駆け寄った。

「実はこれから春夜と一緒に食事でもと思っているんですが、フェイトはどうですか？」

「うん。いいよ。ご飯はみんな食べた方がおいしいし、助けてくれたお礼もしなきゃー！」

「そうですね。でも中々、春夜がうんって言うてくれないんです。だから、フェイトからもお願いしてくれませんか？」

「うん！いいよ！」

するとフェイトは春夜の方を向くと数歩前に進んだ。

「しゅんやお兄ちゃん、一緒にご飯食べようよ。ね？」

と春夜に笑顔で言う。春夜はなんとか断ろうとしたが、その度フェイトが不安そうな顔をするのだ。そんな顔をされたら断れるわけがない。

春夜はリニスに抗議の視線を送るがリニスはニコニコと自分たちの方を見ているだけであった。

「わかったよ。フェイト。じゃ、一緒にご飯食べようか」
「うん！」

フェイトは春夜の答えをを聞くとリニスの方に向き直り嬉しそうに報告するのであった。

そんなフェイトの姿をみた春夜は「まあ、あそこまで喜んでくれるなら、別に訓練はいいか」と思い、美希へと通信をつなぎ、正式に訓練の中止を申請。多少文句を言われると思っていたが、あっさりと許可が下り、訓練は中止となった。が、一つだけ条件を出された。それは、「私も連れて行くこと」だった。理由を聞こうとした春夜であったが、その前に通信を切られてしまった。

さてどうしたものか。そう思いながら春夜はこのことを話すためにリニスに注意を向ける。

「狡いですよ。リニスさん、こんな方法」

「さて、なんのことですかね」

「・・・まあいいです。それと、食事のお誘いお受けする前に、一つお願いしたいのですが」

「はい。なんででしょうか？ 私にできることならなんでも」

「ありがとうございます。では、その食事に一人追加してもらってもいいでしょうか？」

「追加ですか。別に構いませんがどのような方なのですか？」

「どのような・・・」

春夜は美希のことをどう説明しようか考えた。彼女のことを一言でいうと明るく元気な人なのだが、それだとあまりにも抽象的だ。とちよつと困っていた春夜だが、それはクライシスからの念話により解決されることとなった。

『マスター、ボイスメッセージが届いています』

恐らく美希だろうと春夜は思った。現在、春夜にメッセージを送る人間は限られている。両親と美希の3人だけだ。まあ、美希が人間かどうかは少し怪しいが。

春夜はリニスに一言言つて、メッセージを確認するため2人と離れた。

「クライシス、メッセージは1件か？」

『はい。美希様からです』

「わかった。早速再生してくれ」

『了解』

そうして美希からのメッセージが再生された。20秒ほどの短いものだった。

『訓練のために用意していたトラップの回収が終わったので今からそっちに向かいます。2〜3分程で到着するのでリニスさん達に話し通しておいてね』

メッセージを聞いた春夜はリニス達のもとに戻り美希が今からこちらに来ることを説明した。

春夜はなぜ美希がリニスの名前を知っているのかが少し疑問であったが、恐らく近くにいて、訓練の様子をモニタリングでもしていたのだろうと思いあまり気にしないことにした。

そうして、美希は本人の言う通りメッセージの3分後に春夜達と合流。4人はテストタロツサ家へと向かった。

第六話

リニスは自宅へと続く道を歩きながら考え事をしていた。彼女が考えているのは春夜についてだ。

彼女が春夜を夕食に誘ったのには理由があった。

お礼とお詫びをしたいというのは嘘ではない。彼は溺れていたフェイトを助けてくれた恩人である。リニスにとってフェイトは家族同然の存在だ。

第一印象は、ロリコンの変態最低野郎という最悪なものではあったが、それは彼やフェイトの話から払拭された。勘違いとはいえ、恩人である彼を攻撃してしまったのだ。その非礼を詫び、フェイトを助けてくれたお礼がしたいというのは彼女の本心である。

では理由とは何か。それは二つあった。

一つは彼の戦闘能力について。

リニスはそこらの武装局員の1人や2人は簡単に倒せる自信があった。さらに先程の戦闘、フェイトの状態を見たリニスは頭に血が上っていた。殺傷設定にこそしていなかったが、春夜を本気で行動不能に追い込むつもりでいた。

しかし、彼はバインドを自力で破壊し、リニスの魔力弾による全力射撃を躲して、デバイスを起動。即座に反撃へと移った。さらに一瞬ではあるがリニスの視界から消えた。気づいた時には彼は銃（デバイス）を構え、照準を定めていた。

あの短い戦闘でリニスは春夜の実力を見極めていた。彼は自分と同等以上の実力があると。彼女は春夜の実力に興味を持った。彼の戦闘力について、後ほど合流してきた天野美希と名乗る女性から道中で話を聞いていた。彼女は春夜の教師役で局勤めの両親に替わり、家事なども手伝っているそうだ。彼女が春夜に教えていることは、特別なことではなかった。基礎から応用までリニスがフェイトに教えているものと大して変わらなかったのだ。違うところは訓練日数だけ。

結局、彼の戦闘能力は彼自身の才能ということになる。夕食の席を利用して彼と直接話す。それが一つ目の理由だ。そこでリニスは、春

夜に共同訓練を申し入れるつもりだった。きつとフェイトにとつても彼にとつても良い刺激となる。まあそれにはもう少しフェイトの魔法の知識と技能の向上が必要になるのだが。

もう一つは、純粹にフェイトの友達になつて欲しいというものだ。

リニスがフェイトと出会つてから、もう半年が経つ。彼女の母親の教育方針上、フェイトは学校に行つていない。というより母親の仕事の関係上、学校に行けないのだ。

(そのために私が居るのですけどね)

そのせいでリニスはフェイトにこのまま友達ができないのではないかと心配していた。

(彼がフェイトの良き友となつてくれればよいのですが、私としてはそれ以上の関係になつても全然問題ないのですけどね♪)

リニスが美希と話している間、フェイトは春夜とずっと話していた。好きな食べ物、得意な魔法など会話自体は普通のものだがフェイトはとても楽しそうに話している。春夜も満更でもなさそうだ。

(あれでは、友達というより仲の良い兄妹ですね)

目的地まであと数分。リニスは前を歩くフェイトと春夜を見ながら、ニコニコと終始笑顔なのであった。

「着きましたよ。これが我が家です」

現在時刻1650。4人はテスタロッツサ家玄関前に到着した。美希と合流し、テスタロッツサ家に向けて出発した時間が1620。リニスの話では20分程だということだが、会話をしながらゆつくりと歩いてきたせいにか少し遅れてしまったようだ。日はすでに落ち始めている。

「・・・大きいですね。ここに二人で?」

「いえ。ここには私とフェイト、それから彼女の母であり私の主であるプレシア、そしてもう一人・・・」

とその時、テスタロッツサ家の玄関が開き中から一人の少女が出てきた。少女の身長は美希と同じくらい。歳は10代前半。茶色の髪の色

毛を肩のあたりまで伸ばしている。服装はセーラー服。右の襟に「Ⅲ」の形をしたバッジを付けている。

春夜は少女の姿を見て驚いた。性格には彼女が装備している物に。腰から頭まで伸びる煙突。右肩から伸びる二つの砲。腰についているのはミサイルだろうか。

（それに手に持っているのって、どう見ても錨だよな？　ということはあるは魚雷か？）

春夜はそれが一番疑問だった。あの錨をどう使うのだろうか。まさか打撃武器として近接戦に用いるのだろうか。春夜はそんなことを考えながらリニスと少女の会話を聞いていた。

「あら、フェイトとリニス。遅かったじゃない。何かあったのかと思っただけ心配したのよ。遅くなるのなら連絡くらいしなさいよね」

「雷、留守番ありがとうございます。心配かけてすみません。これからどこか行くのですか？」

「あんまり遅いから、あなたたちを探しに行くところだったのよ。えーと、そちらのお二人は？」

「紹介がまだでしたね。こちらは、鷹城春夜さんと天野美希さんです。春夜は川に落ちてしまったフェイトを助けてくれました。美希は春夜の魔法の先生です」

「こんにちは」

「こんにちは。雷よ。カミナリじゃないわ。そこのもよろしく頼むわね。って、フェイト、川に落ちたの!?　大丈夫だった？」

「うん。しゅんやが助けてくれたから大丈夫だよ！」

「そう・・・よかった・・・」

「雷、詳しい話をするのでとりあえず中に入りましょう」

「そうね。いつまでもお客さんを外で立たせているわけにもいかないわね。リニス、案内お願い。私はお茶を入れるわ」

「了解です」

そう言っただけ雷は家の中へと戻って行った。途中、「お茶よりジュースの方がいいかしら？」と呟いていたが、春夜たちの耳には届かない

か
っ
た。
。

第七話

「なるほどね。ま、何はともあれ2人とも無事でよかったわ。フェイトもおつちよこちよいね〜」

そう言つて笑う雷。

あれから雷はリニスら4人から事情を聞いていた。

ちなみに、飲み物は春夜とフェイトがオレンジジュースを。美希、リニス、雷はお茶を飲んでいる。

「む〜 いかずちまでわらうの？ ひどいな・・・くしゅん！」

「あら？ 体、冷えちゃったのね。リニス、私はこれから2人をお風呂に入れてこようと思うのだけど・・・」

「はい。そうしてください。私は夕飯の準備をします。美希さんも一緒に入ってきてはどうですか？」

「私は別にいいですよ。それよりもご飯の準備手伝いますよ。一人では大変でしょ？」

「ありがとうございます。助かります。それではお言葉に甘えて」

「決まりね。じゃ、リニスそっちは任せたわね。ほら、フェイト、春夜行くわよ」

雷は残ったお茶を全てのみ、フェイトと春夜を浴場へと促す。フェイトは「は〜い」と返事をする、雷と同じように残ったオレンジジュースを飲み干し席を立った。春夜はというと、

「いや、俺は別に・・・」

「つべこべ言わない！ 風邪なんて引いたら大変よ。それに訓練で体動かして汗かいたままじゃ気持ち悪いでしょ？」

雷は強引に春夜を引っ張っていく。フェイトはその後をついていく。春夜は未だに何か言っているが雷はそれを無視して連行する。

「9歳とはいえ俺は男なんだが・・・」

「あら？それがどうかしたかしら？ その年ならまだ銭湯や温泉でもどちらでも入れるはずよ。よかったじゃない♪」

「いや、よくないのだが・・・」

「はいはい。わかったから行くわよ」

そうして3人の姿も声も聞こえなくなりこの場にはリニスと美希の2人が残された。

2人は使ったコップを片付けて、調理場へと移動した

テスタロッサ家 浴場 更衣室

春夜は戸惑っていた。

(おかしい。何故だ……)

現在、春夜、フェイト、雷の3人は入浴準備をしている。

雷はフェイトの髪をまとめ終わり、今度は自身の髪をまとめているところだ。長い髪型ではないのですぐに済むだろう。

フェイトは脱衣を開始しており、もうすぐに終わるところだ。

男である春夜には準備という準備はない。脱衣をして終わりだ。だが、春夜はパンツ一枚の状態で止まっていた

(俺は何故、雷の体に反応している！)

雷はすでに脱衣を開始しており、現在下着状態。もうすぐ全て脱ぎ終わる。

春夜はそんな雷をチラチラと見ながら考え事をしている。

(俺はロリコンではないはずだ。もしかして精神が体に引っ張られているのか？ だいたい何故こんな状況になったんだ……)

春夜は今日の自分の行動を省みた。だがいくら考えてもこのような状況になる原因が見つからない。

(家まで来たのが悪かったか？ いや、そんなことはないはずだ。そもそも、初対面で一緒に風呂に入ることになるなんて普通予想できないだろう……)

「これでよし。ほら、春夜も早く脱ぎなさい」

「あ、ああ」

春夜があれこれ考えているうちに雷は入浴準備を終えたようだ。

春夜は雷の裸体を見ないようにしながら、パンツを脱いだ。

「じゃ、入ろうか」

三人はフェイトを先頭に、雷、春夜の順で浴室へと移動した。

「さあ、まずは体を洗うわよ」

「は〜い」

「.....」

春夜はテストタロッサ家の浴室を、いや、浴場をみて唾然とした。

広い。広すぎる。一家庭の風呂とはとても思えないほどだった。

一度で10人は余裕で使える洗い場。同人程入れるであろう浴槽。その浴槽を囲っているのはゴツゴツとした岩だ。そして一番目立つの岩に掛けられた金のライオンの頭部のオブジェ。その口からはお湯が浴槽へと流れている。豪華な公衆浴所か旅館の贅沢なお風呂と言われても納得できる程だった。

「ほら、春夜もいつまでもそんなところにいないで、こつち来なさい」

春夜が浴場の広さに圧倒されている間にフェイトと雷は洗い場へと移動していた。春夜も慌てて洗い場へと移動した。

体と頭を洗い、現在は三人で浴槽に漬かっている。春夜を真ん中に、右にフェイト、左に雷という状況だ。

「ふう〜やつぱりお風呂はいいわねえ」

「うん。皆で入るお風呂は楽しいね♪」

「ふふ、そうね」

「.....」

「あら？　どうかした？」

「なぜ、俺が真ん中なんだ？　それにこんなに広いのになぜ引付く？」

「両手に花でいいじゃない♪」

「.....」

流石にフェイトに反応することはない。しかし、雷に対しては別だ、春夜の左腕には先程から雷の柔らかい部分が当たっていた。

（落ち着け息子よ。ここで元気になるな。無心になるんだ。邪念を捨てろ）

春夜は目を閉じ、瞑想する。

「.....」

「あれ？　春夜？　お〜い」

「……」

「ふうん。そういうこと。じゃあ……」

雷は春夜に引つ付いたまま、左手をそつと春夜の股間の方へと手を伸ばした。そして指先が触れた瞬間、春夜は立ち上がり急いで二人から距離をとった。

フェイトはそんな春夜のことを不思議そうに見ていた。

「どうしたの？ しゅんやお兄ちゃん

「どうもこうも……えくと……雷サン？」

「ふふ。ちよつと悪戯しただけよ。だって無反応なんだもん。反応しちやっただ？」

「それは……その……」

「あら、可愛い♪ じゃ、そろそろあがりましょうか。最後に肩まで浸かってゆつくり100数えてから……ね？」

「は〜い」

「ほら、春夜も。もう変なことしないから」

「……」

「ほくら、早くこつち来なさい」

「はやく〜」

雷はいつまでも立っただまま動こうとしない春夜に向かって元の位置来るよう促す。

「……わかった」

春夜は渋々位置に戻り、肩まで湯に浸かる。

「じゃあ数えるわよ」

「は〜い」

「せーの」

「い〜ち、に〜い、さ〜ん」

雷とフェイトはゆつくりと100数え始める

最初は無言だった春夜だが途中から雷に促され、一緒に数える。

そして、

「「きゅうじゅうきゅう、ひゃ〜く」」

「じゃあ、あがりましょうか」

「あついく」

「ふう・・・」

こうして三人は着替えて夕食に向かうのであった。

第八話

テスタロッサ家 リビング 台所

フェイト達三人がお風呂に向かった頃、リニスと美希は夕食の準備を始めた。

「リニス、今日は何を作るの?」

美希とリニスはテスタロッサ家向かう道中様々な話をして、親睦を深めた。

話の中心は春夜とフェイトについてだった。どんな訓練をしたかどんなことが得意かなどの訓練の話から、2人の癖や趣味など様々なことを話した。

出会ってまだ数時間だが、今では旧来の友人の様に二人は話す。

「そうですね・・・とその前にご飯を準備しましょうか」

「そうだね。炊き上がるのに時間かかるし、炊き忘れなんていやだしね。そういえばテスタロッサ家では主食はパンと米どっちが多いの?」

「基本はパンですね。最近はお米の日も多くなっていますけど。今日は育ち盛りの男の子も一人いますし、少し多めに炊きますね」

そう言ってリニスは炊飯器から釜を取り出す。

「春夜に美希、私とフェイトと雷それとプレシア。6人ですね。多めにして7合でいいですね」

リニスは釜に入れた米を2〜3回研いだ後、水に浸し炊飯器へとセットする。

「これで30分後にスイッチを入れるだけです」

「そうだね。リニス、一つ聞いていい?」

「なんですか?」

「プレシアって?」

「ああ、フェイトの母親です。今は仕事が忙しくて一緒に食事とかはできないんですけど・・・」

「そうなんだ。まあ仕事じゃ仕方ないよね。それじゃあ話を戻して、なに作ろっか?」

「今日は人も多いですし、あまり時間がかからないものがないですね」「時間がかからないもの……例えば?」

「そうですね……カレーなんてどうでしょう?」

「お、ベターだね」

「はい。ですが、時間もかかりませんし、手間もかかりません」

「確かに。でもただのカレーっていうのもな……」

「でしたら……ちよつと待っててくださいね」

そう言つてリニスは冷蔵庫の方へと歩いていき、中を確認する。

「牛乳に……卵に……とこれなら」

冷蔵庫を開けた状態のまま美希の方へと顔を向ける。

「ハンバーグカレーなんてどうでしょうか? ちよつど材料もありませんし」

「ハンバーグカレーか……うん。いいんじゃないかな」

「では早速取りかかりましょう。美希はカレーを作ったことはありませんか?」

「あるよ」

「それではカレーの方をお願いします。私はハンバーグを作ります。材料と道具はあるものを自由に使って構いませんので」

「りよ〜かい」

そうして二人のハンバーグカレー作りが始まった。

美希はカレーの材料を探すため冷蔵庫へ。リニスはハンバーグの材料と調理道具を持って一旦食卓テーブルへ。

(材料と道具は……これでいいですね)

用意した材料と道具をテーブルに並べ、不足している物がないか確認する。

同じく美希も材料と道具の準備を終えていた。二人は手を洗い調理を始めた。

(まずは玉ねぎをみじん切りにして……)

リニスは玉ねぎ1個をみじん切りにするとフライパンに油をひき、弱火で飴色になるまで炒める。その後、粗熱をとるため冷蔵庫へ。

熱をとっている間にポウルに合挽き肉、卵、牛乳、パン粉、塩・こ

しょうを入れる。

(後は玉ねぎを入れてこねるだけです。美希の方はどうでしょうか)

台所で作業をしている美希の方へと視線を向けるリニス。美希は材料を切り終わり、炒め始めるところだった。

(任せておいても大丈夫そうですね)

視線を戻して自分の作業を再開する。冷蔵庫に入れた玉ねぎを取り出し、他の材料と一緒にボウルに入れてこねる。

白っぽくなつたところでこねるをやめ、適度な大きさに分け、両手の平を往復させて空気を抜きながら小判形に成形する。

(そろそろご飯を炊いてもいいですね)

人数分の成形作業が終わつたところで、炊飯器のスイッチを入れる。

「そっちはどうでしょう、美希？ こちらは後は焼くだけです」

「こっちはまだかかるかな、今材料を煮込み始めたばかりだから」

「わかりました。ハンバーグ焼いちゃいますね」

リニスはハンバーグを2〜3個ずつフライパンに入れ蓋をして弱火で焼く。全て焼き終わる頃には美希の方も材料の煮込みを終えるところだった。

「美希、こちらは終わりましたよ」

「うん。こっちは後はルーを入れてもう一回煮込むだけ」

「そうですか。って美希、それは？」

美希の手には皮を剥いたりんごが丸々1個握られていた。

「え？ りんごだけど・・・ほら、入れると美味しくなるっていうでしょっ」

「確かにそうですけど。そのまま入れるつもりですか？」

「そうだけど・・・」

「・・・すりおろすか、薄く切ってから入れましょう。だいたい芯はどうするんですか？」

「あ・・・」

「量は1個でもいいですけど、半分くらいにして。残りはサラダにし

ましようか」

「う・・・了解」

美希はりんごを半分に切り、すりおろしてルーと一緒に鍋に入れる
「あととはとろみができるまで煮込むだけです。ちようどフェイト達も
上がってきたみたいですよ」

廊下の方からは人の話声と足音が聞こえていた。

「ん〜いいにおい〜 リニス、今日はカレー？」

お風呂から上がった三人はリビングへと移動していた。

フェイトはリビングに着くと大きく息を吸った。カレー特有の臭
いが鼻腔を刺激する。たまらず台所へと駆け出す。二人もそれを
追って台所へと向かう。雷は突然走りだしたフェイトを注意する。

「こくら、フェイト。走ると危ないでしょ？」

「三人ともおかえりなさい。今日はハンバーグカレーにしてみました
た。もう少しで出来るので、待っていてください。雷は食器の配置お
願います」

「りよ〜かい。春夜、フェイトのことお願いね〜」

「わかった。と、リニスさん」

「リニスでいいですよ。どうかしましたか？」

「美希は・・・その・・・大丈夫だったか？ 料理自体は好きなんだ
が・・・」

「ああ・・・まあ、はい。なんとか」

「悪いな。悪気はないんだ。許してやってくれ」

「いえ。手伝って頂けるだけありがたいです」

「そう言ってもらえるとありがたいよ。それじゃ俺はフェイトの相手
してくるよ」

「お願いします」

春夜はフェイトの所へと行き、一緒にテレビを見ながら時間を潰し
た。

数十分後、リニスから食事の準備ができたとの知らせを受け二人は

食卓へと向かった。

第九話

「準備はいいですか？」

「ああ、いつでもどうぞ」

場所はフェイト家近くの草原。

リニスと春夜は、10メートル程の距離を空け対峙している。

リニスの手には、彼女のデバイスである黒い杖——先端に金色に輝く台座、上部に同じく金色の球体がくっついている——があり、春夜の手には強襲モードのクライシスが握られていた。

二人とも、戦闘服姿。バリアジャケットを展開していた。

リニスは見た目はいつもと変わらない。春夜は黒の戦闘服に黒のファストヘルメット、X T A K型の肘膝プロテクター、クリアのシューティングゴーグル、ナックルガードの付いた指貫型の手袋をそれぞれ装備していた。上着の裾は邪魔にならないようズボンの中に入れてある。

「随分と黒いですね。それに立派な装備で」

「そりゃどーも。これでも必要最小限だけだな」

「そうですか」

二人が何故このような事になっているのか。発端は数時間前に遡る。

春夜と美希がフェイト達と出会って 1ヶ月が過ぎたある日。

あれから二人はフェイト達三人と度々会っており、訓練や勉強も一緒にすることも度々あった。魔法の勉強を始めたばかりのフェイトは本格的な実戦訓練はできないが、座学等は春夜も一緒に受けていた。

講師は主にリニスが行い、補佐に美希がついている。内容はフェイトに合わせるための基礎的なものとなるが、春夜も習ったことを全てを理解しているわけではないので、復習と理解を深めるのに良い機会だった。

雷はというと、最初は見ていただけだったが、最近では空いている

時間に美希やりニスに個別に指導を受け、簡単な魔法は使えるようになっていた。

もちろん訓練だけではない。一緒にお茶会をしたり、ご飯を食べたりなどプライベートでの付き合いもあった。

「ほんと、フェイトは勉強熱心よね。今週分、全部やつちやうなんて」
片手で頬杖をつきながら雷が言う。

「えへへ、勉強するのが楽しくて……」

「この調子じゃ、春夜が抜かされるのも時間の問題っぽいわね」

「う……否定できない。たまに俺がわからない問題もスラツと答え
るし」

「このままいけば、模擬戦とかも思ったより早くできるかもしれませ
んね」

現在、5人はフェイト家の中庭の白い円卓に座ってお茶会をしてい
た。席の順は春夜からみて、右に美希、左にフェイトその隣に雷、春
夜の向かいにリニスが座っている。

時刻は午前10時。本来この時間は座学の時間であったが、予定し
ていた範囲をフェイトが予習ですべてやってしまっていたので、早々
に終わらせて休憩をしている。

「模擬戦なんてまだ無理だよ。春夜みたいに速く動けないし、詠唱
だって……」

「逆に言えばもうそれだけの差しかないってことだよ。知識面じゃ完
全に負けてるし……」

「そうだね。テストしてもフェイトはだいたい100点だけど春夜は
70〜80点くらいだもん。私としては十分じゃないのって思うけ
どね」

「教える側としては、毎回満点だと嬉しいと思う反面、作った側として
はちょっと悔し気もしますね」

「確かにね。なんか、そんなに簡単だったかなって思うもん」

「うう……ごめんなさい……」

「ふふ、なんでフェイトが謝るんですか？」

「そうだよ。テストの結果はフェイトが頑張った証だよ。胸張って

いいんだよっ。」

「美希の言うとおりによ。フェイトはもつと自分に自信を持った方がいいわ」

「えへへ……ありがとう。でもそれはリニスと美希がいつも分かりやすく教えてくれるからだよ。だから、これからもよろしくお願いします」

「フェイト……」

「あくもう、フェイトはかわいいな」

美希は席を立ち、向かいのフェイトの方へと歩いて行くと、後ろから抱きつき頬擦りをする。

「わっ……んっ……美希くすぐったい……」

「良いでないか、すりすり」

「ふふっ。美希、程々にしてあげてくださいね」

「は〜い」

「よし、私もやっちゃおう♪」

雷も美希と同じようにフェイトの方に横から抱きつき頬擦りをする

「雷まで……んふ……もう……やめてよ……」

フェイトは拒絶の言葉を口にしながら、その顔は嬉しいそうにでもちよつと恥ずかしそうに笑っていた。

そして二人はしばらくすると満足して、自分の席へと戻った。

「あ、そうだ。リニス、昼から春夜と模擬戦してくれない？」

「はあ?」「えっ?」

「だから、模擬戦。ダメ?」

「いえ、構いませんが……何故、急にそんなことを?」

「ほら、さつきフェイトと模擬戦の話してたじゃない? それ聞いて思い付いたの」

「思い付いたって……おい美希……」

「話は最後まで聞く! もちろんちゃんとした理由はあるよ。ほら春夜って私としか模擬戦したことないでしょ?」

「……ああ。それがどうしたんだ?」

「毎回同じだと飽きちゃうし、パターン化して応用力も身に付かない。それにフェイトもちやんとした対人戦闘は見たことないでしょ?」

フェイトは美希の言葉に頷く。

「だからこそその模擬戦。相手は雷ちゃんっていうのも考えたんだけど……」

「私じゃ無理ね。現状、魔法戦闘の場合私は春夜に勝てないわ。悔しいことにね」

「そういうこと。納得してくれた?」

「まあ、そこまでの理由があるなら。それにリニスと戦うのにも興味あるし」

「リニスは?」

「私は構いませんってさつきも言ったじゃないですか。そこまで考えているのでしたら反対する理由もありません」

「よっかた♪ じゃ二人ともよろしくね」

そして冒頭へと戻る。

「二人とも準備はいい?」

「ああ、いつでもいいぞ」 「私もいけます」

「それじゃ、ルールを確認するよ」

そして美希当初決めたルールを再度確認する。

「時間は無制限。飛行魔法の使用禁止。決着はどちらかが降参するか、私が勝負がついたと判断するまで。魔法攻撃はもちろん非殺傷。刃物の刃は潰すこと。OK?」

「ああ、問題ない」 「了解です」

「よし。最後に。結界張つてあるから、思いつきりやりなさい!

開始の合図こっちでやるから」

そう言つて美希はフェイトと雷を連れて距離をとり、安全のため周辺にプロテクションを展開する。

「じゃあ、始めるよ」 3カウントでスタート。いくよ。3…

2
·
·
·
1
·
·
·
G
O
!

第十話

開始の合図を聞いた瞬間、後ろに引いていた右足に魔力を集中、爆発させ瞬時に相手との距離を詰める。――《瞬動》と春夜は呼んでいる。

「っ！」

春夜の姿が振れた。認識すると同時に杖と障壁どちらでも防御できよう身構える。この場合において、取りうる戦術は大きく2つ。先手必勝か様子見。どちらの場合でも距離を開けるも詰めるも本人次第だ。どちらにせよ動いたということは、攻撃する可能性が高い。振れの方向から接近だと予測できる。接近からの攻撃――打撃、刺突、斬打撃のいずれか。

ガギイン

周囲に金属同士がぶつかる音が響く。

春夜は突進の勢いをそのまま強襲モードのクライシスでリニスの胸部目掛けて突き、それをリニスが杖で防いだ。

鏢迫り合いの状態で二人は油断することなく、相手の動向を注視する。

「いきなりですか」

「リニス相手に距離を開けるのは得策じゃないと思っただけ。まだまだ行くよ！」

右手を銃床から握把へと移し、クライシスを僅かに引いて銃口を下げ、射線上にリニスを捉えて引き金を引く。

バババツ

銃口からフルオートで魔力弾が放たれる。

(どうやら前者だったようですね)

そんなことを考えながらリニスは障壁を展開。そのまま後方へ姿勢を倒し、射撃の勢いを利用してバク転の要領で銃口を蹴り上げ後退。そのまま二回転三回転と繰り返し、距離を開けつつ数発の魔力弾を発射する。

放たれた魔力弾は確実に目標を捉える。春夜は初弾を障壁で防ぎ、

2発目以降は右に転がり回避。

そのまま膝撃ちの姿勢になり再度発砲。

バババツ バババツ

6発の魔力弾がリニスへと直進する。

リニスは最初の3発を障壁で防ぎ、続く3発を難なく回避。

「確かにその速さは脅威ですけど、そんなに素直だと回避は容易です」
「それは・・・どうかなっ！」

その時、1発の魔力弾が背後からリニスを襲った。それは先程回避したはずの魔力弾だった。春夜はその中に1発だけ誘導弾を混じらせていたのだ。

回避直後の隙をついた死角からの攻撃。回避も防御も不可能だ。命中を確信しつつ結果を見守る。

「っ・・・なんで・・・」

しかし、リニスは無傷であった。

魔力弾は確かに命中した。リニスは回避も防御

していなかった。それどころか攻撃されたことに気づいてさえいない。だが無傷である。その結果に驚く春夜。

「・・・よんでいたのか？」

「ふふっ。そんなに驚かないでください。確かに今は良い手でした。油断していたら今のでやられていたでしょう」

「どういうことだ？」

「簡単なことですよ。よく言うでしょ？ 《かもしれない運転》を心掛けなさいって。春夜なら死角からの攻撃を狙って来るのではないかとね。どうやら搦め手がお好きなようですから。なので予め障壁を展開して置きました」

「はは・・・そういうことか・・・さすがリニス」

「戦闘の基本です。相手の行動をできるだけ多く予測し、それに対応する策を立てる。どんな人間でも想定外のこと起きれば数秒は動きを止めます。戦闘中にはその数秒が命取りになる場合もありますから」

「なるほど。確かにその通りだ」

春夜は先の攻撃は当たると確信していた。それ故に動きを止め思考を停止してしまった。例え一瞬であったとしても、これが実戦なら命を落としていてもおかしくはない。このような場合、当たらなかつた場合を想定し、次善の策を考えるべきだ。

「それでは次はこちらからいきませう」

リニスは春夜へと右手を向ける。すると春夜の手足は黄色の環に拘束される。

「なっ！」

「さて、この状態で防げますかね？」

杖の先端を春夜へと向ける。

チャージは既に始まっていた。黄色い光が先端へと収束。段々と大きくなつていく。そして数秒でチャージが完了し、球状の部分は黄色の輝きを溢れさせ発動する時を今か今かと待っている。

「それでは頑張ってください♪」

そして黄色の魔力が放たれた。

「っ！」

春夜はなんとか、左手の拘束を解き、全力で障壁を展開。一枚では足りない判断し、二枚三枚と重ねて展開。計五枚の多重障壁となつた

砲撃は一枚の障壁を軽々突破。続く二枚目も突破され、三枚目でもうやく勢いが衰え、四枚目で止まった。だが、砲撃はまだ続いている。このままでは時期に破られる。

(クライシス、障壁の維持は俺のみで行う。バインドの破壊とリニスの背後への転移は可能か?)

『多少時間はかかりますが可能です』

(やってくれ。転移は準備でき次第すぐに)

『了解』

クライシスによる補助がなくなり、障壁の強度が一瞬落ちる。砲撃の侵食が進み障壁は破壊寸前だ。

「うっ……」

そして、程なくして四枚目が破壊され、障壁は最後の一枚となる。

それとほぼ同時に、手足を拘束していた黄色の環が解かれた。

(よし。頼むぞクライシス。もう長くは保たない)

『……』

返事はなかった。

それに気にすることなく、右手も前にだし、両手で障壁の維持に集中する。

どれくらいの時間がたったのか。春夜にはわからなかった。実際にはほんの数秒だったがそれが春夜には10分にも20分にも感じられた。

やがて最後の障壁にも亀裂が現れ始め、全損も時間の問題となった。

(これまでか……)

障壁は亀裂だらけ。もうすぐに破壊されるだろう。

今の春夜は身体強化に回していた魔力も全て障壁に注ぎ込んでいく。その上、クライシスによる補助もない。威力は弱まったとはいえ、そんな彼を戦闘不能にするには十分だ。

諦めて腕を下ろそうとしたその寸前

『座標特定終了。術式展開……完了。転移準備完了。転移します。』
クライシスの言葉と同時に障壁は消失。

春夜は光の濁流に飲み込まれた。

第十一話

「バインドは破壊できたみたいですが……」

砲撃の先を見つめながらサーチャーで周辺を警戒する。

砲撃直後、春夜は左手のバインドを破壊。多重障壁を展開したのは確認出来ていた。

その後、障壁を数枚突破。バインドが全て破壊されたのを見届けたリニスは現在の春夜にこの砲撃は防ぎきれないと判断し追撃は行わず、周辺警戒に集中していた。

やがて砲撃は障壁を全て破壊し、黄色の濁流が春夜を飲み込んだ。それをサーチャーの映像で確認するとリニスは警戒を強めた。

（これで決まってくればよいのですが……）

春夜は砲撃を防ぎきれなかった。回避もあの状況ではほぼ不可能。何らかの方法でダメージを軽減し戦闘可能状態だったとしても、その状態の彼を追撃するのは簡単だ。

だが、リニスには一点気になるところがあった。

（あの瞬間、ほんの少しだけ砲撃の侵食度が上がった）

サーチャー越しに見ただけなので、錯覚という可能性はある。だが、リニスはあれが錯覚などではなく事実だと直感していた。

（防御を突破したからというのは安易ですね）

リニスの頬を一筋の汗が伝う。

それを手の甲で拭い春夜のいた場所を見つめる。既に砲撃は消失し、周辺は土煙に包まれ、春夜の姿は確認出来ない。

「……」

油断なく周囲を警戒。土煙が晴れるのを待つ

やがて土煙は風で流され、視界が戻る。

「っー」

しかし、そこに春夜の姿はなかった。それを認識すると同時にリニスは慌てて振り返った。

（どこに行ったの?）

周辺を見渡す。しかしそこには、困惑した顔で同じように周りを見

渡す雷とフェイト、そして笑みを浮かべてリニスを見つめる美希の姿があるのみ。

春夜の姿はどこにも見えない。

(美希のあの顔。やはりまだ勝負はついていない)

サーチャーの探索方を映像から魔力探査に切り替え再度周辺を調べる。

反応は4つ。1つはリニス自身。あとの3つは美希、雷、フェイトの反応だ。念の為、反応がある地点を拡大して確認するが春夜の反応見当たらない。

「いない・・・もしかして・・・」

リニスは自身と美希たち3人の反応を除外。再度の魔力探査をかける。

反応は――

(いたっ！場所は・・・真下っ！)

魔力反応を確認するとリニスは足元をみる。そこにはリニスの影から腕が伸びていた。そして、腕は彼女の右足を掴む。

「っ！」

それを認識したと同時に後方へと飛び退く。

「影を媒介にした転移。やりますね」

その間にも腕が伸びていた場所からは頭、上半身と続いて出てきておりもうすぐ転移が完了するところだ。

リニスは転移が完了する前に魔力弾での追撃を試みる。その時、右足に違和感を感じた。

(冷たい・・・氷?)

リニスの右足、正確には右足首に薄く氷が張っていた。

そこで思い出した。春夜が変換素質持ちであることを。

その隙に春夜の転移は完了。リニスを警戒しながら手足を動かして、体の調子確かめている。

「うまくいけば機動力を削げると思ったんだけど……その様子だとあまり効果はないみたいだね」

「ええ、まあ。確かに、違和感はありませんが、無視できない程ではありません。ところでデバイスが待機状態みたいですが、もしかして降参ですか？」

今の春夜はヘルメットやプロテクター類が外されおり黒服姿だ。デバイスも待機状態になっているので降参だと思われるもおかしくはない。

「まさか。勝負これから。悪いけどここからは本気でいくよ」

「今までは本気ではなかったと？」

「そういう訳じゃないんだけどね。ただこれは本当に加減できないから」

「それはどういう……っ！」

その瞬間、春夜の魔力が膨れ上がった。

春夜の体からは魔力が余剰光となって溢れている。

春夜はもう一度瞬動を使いリニスへと接近する。

(速いっ！)

最初の瞬動は桁違いの速度。リニスがそれを認識した時には既に春夜は攻撃態勢に入っていた。

リニスは慌てて障壁を展開する。

パギイーン！

しかし、春夜の拳は止まることなく障壁を貫通する。

「なっ……！」

リニスは咄嗟に両腕で春夜の攻撃をガードするが、衝撃で数メートル吹き飛ばされる。

(障壁があんなにあっさり……スピードも威力も桁違い。腕は……折れてはいないみたいだけど)

攻撃の余波でしびれる両腕の感触を確かめる。

(砲撃後で魔力にはあまり余裕がない。それに障壁が意味をなさない。ただあれほどの魔力。長くは持たないはず)

額の汗を拭うとリニスは前を向いた。

「クライシス、残り時間は？」

『およそ2分。それとご注意を。現在のマスターの体と魔力量では、強力な攻撃と防御を同時に行うことは困難です。攻撃の際、障壁への魔力供給はカットされ身体強化のみとなります』

「わかった」

(時間がない。一気に畳み掛ける)

そう決めると春夜は周辺に可能な限りの魔力弾を生成。その数50を超えていた。

「ちよ・・・なんですか！ その数！」

「とりあえずこれが今の俺の限界かな。じゃ、行くよ！」

そういうと魔力弾を数十発をリニスへと発射。

「多ければいいというわけではっ・・・！」

リニスはステップ、障壁、受身あらゆる手を尽くし魔力弾を防御・回避する。

さすがに全ては防げず小さなダメージが蓄積していく。

そして最後の一発を防ぐと杖を背後へと向け一閃。

パシイ！

「さすがに二度は通じないか」

「当たり前です。それと、いつまで搦んでいるつもりですか？」

そういうとリニスは杖から魔力弾を1発発射した。

『それはもう解析済みです』

しかし、発射された魔力弾は春夜の目の前で消滅した。

「なっ！」

「驚いている場合？ 俺の魔力弾はまだ残っているよ？」

「っ！」

残った魔力弾が四方八方からリニスを襲う。

リニスは杖から手を離し、前方の魔力弾へと突っ込んだ。

急所やダメージが大きいところ以外は無視。必然手足への被弾が

増える。

そして魔力弾を抜けると振り返り障壁を全力展開。残りの魔力弾を防いだ。

（なんとか防ぎましたが、右足へのダメージが大きい。それに魔力も残り少ない。デバイスも取られている。これは・・・）

「私の負けです」「俺の負けだ」

「えっ?」

「負けは私の方でしょう。デバイスも取られていますし」

「いや、リニスも気づいていると思うけど俺の魔力はもう殆んどない。身体強化がやっと。クライシスもオーバードライブの影響でほぼ使えない。こんな状態じゃ、リニスに攻撃を通すのはほぼ無理だ」

「なるほど。確かにその状態なら私に攻撃を通すのは難しいでしょう。しかし、それは私も同じです。右足のダメージのおかげで素早くは動けませんし、魔力も防御がやっと」

「それもそうか。だったら引き分けかな?」

「私もそれで異存はないです。ですが、せつかなので審判さんの判断も聞いてみませんか?」

「第三者の意見も重要だしな。結果はそのあとでも遅くはないか」

そう言うとき春夜はリニスへと杖を返し、二人で美希たちの下へと向かうのであった。